

彙 報

会 長 小 泉 保

平成2年度第1回常任委員会

日 時：平成2年4月22日（日）午後2時～6時

場 所：三省堂大阪支社

出席者：小泉 保（会長）、影山太郎、崎山 理、佐藤昭裕、清水克正、松本克己、藪 司郎（以上、常任委員）、近藤達夫（常任委員、事務局長）、土田 滋（第100回大会開催大学、大会運営委員長）、上野善道（第100回大会開催大学）。

議事ならびに報告：

- （1） 議事に先立ち、去る2月3日逝去された常任委員・委員寺村秀夫氏の冥福を祈り一分間の黙禱を捧げた。
- （2） 平成元年度決算報告。4月20日（金）午後、三省堂にて会計監査委員梅田博之、南 不二男両氏による監査を受け、適正とみとめられた平成元年度決算の報告があり、これを承認した上で、支出項目の並べ方を一部修正して委員会に報告することとした。
- （3） 平成2年度予算案の審議、決定。
- （4） 第100回大会について。研究発表者の選定、プログラムの決定等を行なった。当日出席者に配布する『日本言語学会大会100回の歩み』については、印刷実費の一部として、1冊200円以上のカンパを募ることとした（当日出席できない会員にも、希望者には郵送等の方法により配布することとする）。
- （5） 第101回大会について。
- （6） 日本学術会議会員、同推薦人選出の手順について。事務局長より、平成2年3月28日学術会議において開催された「第15期会員選出制度説明会」について報告があり、これに基づき、会員推薦までの日程と、

言語学会を学術研究団体として登録するに必要な手続き等を確認し、登録申請カードに記入する関連研究連絡委員会を

第1順位 語学・文学, 第2順位 東洋学, 第3順位 文化人類学・民俗学

とすることを委員会に提案することとした。

- (7) 文部省「学術用語集」について。
- (8) 国語審議会外来語表記委員会試案「外来語の表記(案)」について。文化庁より平成2年3月2日付けの文審(庁文国第44号)で、「外来語の表記(案)」について言語学会としての意見を求めてきたので、事柄の重要性に鑑み、委員全員に、郵便で意見をたずねたところ、6人の委員(会長を含む)から意見が寄せられたとの報告があった。これの取り扱いについては、それぞれが、専門家としての傾聴すべき意見であるとの観点から、言語学会の意見として集約することをせず、そのままのかたちで国語審議会に取り次ぐことにした。
- (9) 九学会連合について。
- (10) 研究発表, 投稿に会員でない者を含むことについて。委員会で継続審議となっているこの件について、常任委員会としては、他学会の状況もふまえ、投稿は会員に限る, 研究発表は代表者が会員であること, の基本方向を確認し, 委員会にのぞむことにした。
- (11) 学会発表データベースについて。事務局長より「学会発表データベースに関する懇談会」(平成元年12月13日, 於京都大学附属図書館会議室)について報告。学術情報センターが希望しているデータベースへの参加については, 当面事態の推移を見守ることとする。
- (12) その他
- (a) 委員大津由紀雄氏が, 海外出張のため平成2年度委員を辞退した。
- (b) 日本学術会議会員柴田 武氏より前回の委員会(平成元年10月14日, 於関西学院大学)で提案があり, 言語学会として全面的に協力することになった「人文系諸科学の研究整備に関するアンケート

ート」を1989年12月5日付けで全会員に発送した。寄せられた回答の集計も全会員宛て郵送した。

(c) CIPL 常置委員会の報告。CIPL 常置委員会委員松本克己氏より、次回の国際言語学会議は、カナダのケベックで開催されることになったとの報告があった。また、ルーマニアの政変によるブカレスト大学中央図書館破壊による窮状に援助を要請してきた同委員宛ての2通の手紙の取り扱いについて検討した結果、言語学会としてできる限りの援助をすることとし、詳細について同委員と事務局で協議した上で、委員会で具体的提案を行なうこととした。

(d) 1991年7月開催の第22回国際シミュレーション&ゲーミング学会の後援団体となることを委員会に提案することとする。

平成2年度第1回委員会

日 時：平成2年6月2日（土）午前10時～12時30分

場 所：東京大学文学部法文2号館2階教官談話室

出席者：小泉 保（会長）、池上二良、井出祥子、井上和子、井上史雄、上野善道、荻野綱男、笥 壽雄、影山太郎、菊地康人、国広哲弥、近藤達夫、崎山 理、佐藤昭裕、柴田 武、柴谷方良、清水克正、下宮忠雄、庄垣内正弘、杉藤美代子、竹内和夫、田中克彦、土田 滋、角田太作、徳川宗賢、徳永康元、長嶋善郎、野元菊雄、林 栄一、原口庄輔、平山輝男、堀井令以知、松本克己、宮岡伯人、宮島達夫、村山七郎、藪司郎、吉田和彦（以上38名）。

委任状：20名。

オブザーバー：南 不二男（昭和63～平成2年度会計監査委員）。

議事ならびに報告：

- (1) 議事に先だち、去る2月3日逝去された委員・常任委員寺村秀夫氏の冥福を祈り、一分間の黙禱を捧げた。
- (2) 平成2年度第1回常任委員会の報告。

- (3) 平成元年度決算報告が承認された。別表1参照。これは、1990年4月20日(金)会計監査委員梅田博之、南不二男両氏より、適正であると認められたものである。
- (4) 平成2年度予算案が審議され、承認された。別表2参照。
- (5) 第100回記念大会について。
- 1) 会長がプログラムの概要を報告し、大会運営委員長土田 滋氏が開催大学としての説明をした。
 - 2) 今回、日本言語学会が第100回大会を迎えるにいたったことは、会員のみならず、広く日本の学術界にとっても有意な情報であるとの見地から、大会案内のポスターを作成した(常任委員会事後承認)との報告があった。
 - 3) 100回大会記念の小冊子『日本言語学会大会100回の歩み』を大会に先立ち、配布した。
 - 4) 『100回の歩み』は、大会会場で参加者に配布するが、印刷実費の一部として、一冊200円以上のカンパを募ることにしたいとの事務局・常任委員会案が承認された。
 - 5) 会長より、第100回記念大会のプログラムの発送が、日本学会事務センターの手違いにより、非常に遅れ、会員諸氏に非常な迷惑をかけたことに対してお詫びすると共に、今後はこのようなことがないよう十分心を致すつもりであるとの表明があった。
- また、委員会会場へ来て待機中であった日本学会事務センター神戸 毅氏が入室し、事情を述べ、陳謝した。会員諸氏に対しては、大会のプログラムの冒頭、及び定例会員総会で会長がお詫びの言葉を述べることにした。
- (6) 第101回(平成2年度秋季)大会は、国立民族学博物館で開催することが決定され、大会運営委員長には崎山 理氏があたることが報告された。尚、この大会は、平成元年11月28日国立民族学博物館においてなされた同館館長梅棹忠夫氏と、本学会会長との協議により、日本言語学会と国立民族学博物館との共催のかたちをとらざるを得ない

との報告があり、承認された。

- (7) 第15期日本学術会議会員、同推薦人選出の手順について。学術団体としての登録、及びそれ以後の手順について説明があり、これを確認した。尚、常任委員会より提案した関連研究連絡委員会のうち第3順位 文化人類学・民俗学は割愛した方がよいとの意見があり、これを受けて、結局、第1順位 語学・文学、第2順位 東洋学とすることとした。
- (8) 文部省「学術用語集」について。専門委員会委員長松本克己氏より、文部省平成2、3年度科学研究費を得て作業を継続しているとの報告がなされ、今後の進め方について種々意見交換をした。
- (9) 「外来語の表記(案)」について。常任委員会の提案通り、委員から寄せられた意見のすべてをそのままのかたちで、国語審議会に取り次ぐこととした。
- (10) 九学会連合について。九学会連合は、平成元年度をもって正式に解散したとの報告がなされた。
- (11) 研究発表、投稿に会員でない者を含むことについて。審議の結果、どちらについても、現行規定通りとするが、その運用は、従来よりも柔軟にするとの基本方向を確認し、実際の取り扱いについては、ケースバイケース、事務局(会長)、常任委員会の判断に委ねることとした。
- (12) 学会発表データベースについて。学術情報センターより言語学会の参加を希望されている「学会発表データベース」については、慎重な態度を取ることとした。
- (13) 学術会議の報告。第14期学術会議会員柴田 武氏より「人文系諸科学の研究整備に関するアンケート」への協力に対して謝辞が述べられ、その後の進展について報告がなされた。
- (14) CIPL 常置委員会の報告。CIPL 常置委員会委員松本克己氏より、次回の国際言語学者会議の開催地がカナダのケベックに決定したとの報告がなされた。

また、同氏に寄せられたルーマニアブカレスト大学中央図書館破壊に伴う援助依頼の手紙に対し、依頼にこたえてできる限りのことをしたいとの同氏の提言を受け、委員会としてもこれに賛同し、事務局を通じて会員に協力の呼びかけをすることとした。

(15) その他。

(a) 1991年7月開催の第22回国際シミュレーション & ゲーミング学会の後援団体となることが承認された。

(b) 第22回国際動物行動学会議の協賛団体となることを決定した。

[別表1] 平成元年度 日本言語学会決算

自 平成元年4月 至 平成2年3月

(単位 円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
B 会 費	7,985,812	1 刊 行 費	4,892,250
C 雑 誌 売 上	1,258,868	2 編 集 費	200,000
D 文 部 省 補 助 金	480,000	3 学 会 事 務 セ ン タ ー 委 託 費	2,002,786
E 預 金 利 息	13,210	4 大 会 関 係 費	875,510
F 雑 収 入	58,572	5 委 員 会 費	100,000
		6 常 任 委 員 会 費	199,690
		7 九 学 会 連 合 会 費	80,000
		8 C I P L 負 担 金	76,250
		9 選 挙 関 係 費	0
		10 通 信 費	169,872
		11 事 務 費	528,838
		12 設 備 費	0
		13 事 務 局 職 員 附 金	600,000
		15 雑 費	0
		支 出 合 計	9,725,196
収 入 合 計	9,796,462	次 期 繰 越	1,789,639
A 前 期 繰 越	1,718,373	[^内 14 選 挙 関 係 等 準 備 積 立 金	500,000]
計	11,514,835	計	11,514,835

支 出 内 訳

1. 刊 行 費	96号	割付・校正料	268,272	
	203 p.	印 刷 費	2,106,350	
		小 計	2,374,622	
	97号	割付・校正料	282,528	
	214 p.	印 刷 費	2,235,100	
		小 計	2,517,628	
		合 計	4,892,250	
3. 学会センター委託費	業務委託費		1,396,344	
	発送料, コピー代, 通信費等		606,442	
		計	2,002,786	
4. 大会関係費	第98回	プログラム割付・校正料	135,000	
		プログラム・出欠葉審印刷費	88,580	
		大 会 費	240,000	
		小 計	463,580	
	第99回	プログラム割付・校正料	135,000	
		プログラム・出欠葉審印刷費	83,430	
		大 会 費	193,500	
		小 計	411,930	
		合 計	875,510	
10. 通 信 費	東 京	96,310		
	大 阪	73,562		
	合 計	169,872	合 計	169,872
11. 事 務 費				

	一般事務費	交 通 費	計
東 京	183,721	94,850	278,571
大 阪	33,487	216,780	250,267
計	217,208	311,630	528,838

[別表2] 平成2年度 日本言語学会予算

自平成2年4月 至平成3年3月

(単位 円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
B 会 費	7,900,000	1 刊 行 費	4,500,000
C 雑 誌 売 上	1,000,000	2 編 集 費	400,000
D 文 部 省 補 助 金	480,000	3 学 会 事 務 セ ン タ ー 委 託 費	1,800,000
E 預 金 利 息	10,000	4 大 会 関 係 費	1,000,000
F 雑 収 入	0	5 委 員 会 費	150,000
		6 常 任 委 員 会 費	200,000
		7 九 学 会 連 合 会 費	0
		8 C I P L 負 担 金	80,000
		9 選 挙 関 係 費	700,000
		10 通 信 費	200,000
		11 事 務 費	600,000
		12 設 備 費	0
		13 事 務 局 職 員 謝 金	700,000
		14 記 念 事 業 費	500,000
		15 名 簿 作 成 費	300,000
収 入 合 計	9,390,000	16 予 備 費	40,000
A 前 期 繰 越	1,789,639	17 雑 費	9,639
計	11,179,639	計	11,179,639

お わ び

事 務 局

日本言語学会第100回記念大会のプログラム送付につきましては、会員の皆様のお手元に届くのが大変に遅れ、御迷惑をおかけ致しましたことを、心より、おわび申し上げます。

印刷完了、日本学会事務センターへの納入まではスムーズに進んだのですが、センター（下請け業者）で約1週間滞っていましたのが直接の原因です。これについては、別掲の日本学会事務センターから本学会会長宛てのおわび状をご参照下さい。（上記彙報もご参照下さい。）

事務局としましても、今回の不手際をおわび申し上げますと共に、今後このようなことが起こらないよう細心の注意を払っていく所存ですので、何卒御容赦、御了解下さいますようお願い申し上げます。

平成2年5月29日

日 本 言 語 学 会
会 長 小 泉 保 先生

(財)日本学会
専務理事 今



謹 啓

このたびの貴会第100回記念大会開催のご案内状送付につきまして、私どもの不注意により貴会会員の諸先生はじめ、開催準備にご尽力されております諸先生に対し多大なるご迷惑をおかけいたしましたこと深くお詫び申し上げます。

今回の事故は、弊センターの発送委託会社が機械のトラブル発生に気づかずにいたことが不祥事を招いた原因でございますが、このような事態を引き起こしましたのは弊センターの委託業者に対する監督不行き届き以外の何物でもございません。

会長先生はじめ、大会を準備なされた土田先生に対しまして、100回の記念すべき大会のご準備を汚してしまいましたこと、誠に申し訳なく衷心よりお詫び申し上げます。

今後はこのようなことが再発しないよう細心の注意をはらい努力をして参りますので、今回の件につきましては何卒ご容赦下さいますよう切にお願い申し上げます。

このたびの貴会様が取られましたご労力および諸経費につきましては、貴会のご指示をお待ち致し、弊センターといたしまして出来得る限りの処置をとらせて頂きたい存じます。

本来ならば早速にお伺いいたしお詫びいたすべきではございますが、何卒本状をもちましてご容赦頂けますよう重ねてお願い申し上げます。

敬 具

第100回記念大会

期 日 平成2年6月2日(土)・3日(日)

会 場 東京大学

第1日(6月2日)

開会の辞 午後2時より

第100回記念フォーラム 午後2時15分～5時40分

《ピジン・クレオールをめぐる連続リレー講演》

いま、なぜピジン・クレオールか?	土 田 滋
言語接触のタイプ	西 光 義 弘
言語はいかに混合するか——オセアニアにおけるピジン化と その変容——	崎 山 理
ピジンでもなしクレオールでもなし——クレオール連続相と 集団間関係——	細 川 弘 明
アフリカ世界とピジン・クレオール諸語	西 江 雅 之

会員懇親会 —— 第100回大会記念パーティー —— 午後6時～8時

第2日(6月3日)

研究発表 午前10時～12時20分

・A会場

- (A1) 上(かみ)タナナ・アサバスカ語における摩擦音の
有声性の3項対立 箕 浦 信 勝
- (A2) モンゴル語の擬態語の構成について 一ノ瀬 恵
- (A3) 満州語における母音 -i- の弱化と軟口蓋音口蓋垂音
及び唇音の変化について 山 崎 雅 人
- (A4) トルコ諸語音韻史上の rhotacism と lambdacism 竹 内 和 夫

・B会場

- (B1) タガログ語の無動詞文の主語 吉 村 近 男
- (B2) ソゴンベ語動詞連体修飾形における奇妙な現象 湯 川 恭 敏

(B3) 「XはYがZ」文の幾つかの変種
 ——‘再主題化’と分析されるものなど—— 菊 地 康 人

(B4) コンピュータ言語学と日本語形態論
 ——今後の言語研究のありかたの一側面—— 荻 野 綱 男

・C会場

(C1) 音韻階層構造についての一考察 高 橋 直 彦

(C2) 語形成における‘HEAD’の概念について
 ——音韻論からの考察—— 窪 箇 晴 夫

(C3) 形容詞比較級の成立条件について 濱 本 秀 樹

(C4) On the Nature of English Periphrastic Causatives
 梅 本 孝

会員総会 1時10分～1時40分

研究発表 午後1時40分～4時

・A会場

(A5) 動詞‘BREAK’と Conceptual Systems ——languages
 with and without classifiers—— 藤 井 洋 子

(A6) 中国語史における「語順の変化」の類型論的検証 杉 田 泰 史

(A7) 膠着的言語に於ける文単位の拡大 池 田 哲 郎

(A8) ワルング語の疑問詞の位置 角 田 太 作

・B会場

(B5) 串本方言の動作の継続を表す形式
 ——「ヤル」・「イル」・「ヨク」—— 大 野 仁 美

(B6) 譲与動詞のアスペクト性 高 原 久 美 子

(B7) 間接受身の意味と発達 柴 谷 方 良

中 川 正 之

木 村 英 樹

小 川 暁 夫

・C会場

(C5) 日本語の非動作主使役文 (=Non-Agentive

- | | |
|---|---------|
| Causatives) について | 酒 井 弘 |
| (C 6) Argument/Nonargument <i>It</i> and θ -Theory | 岩 崎 康 文 |
| (C 7) 英語における左方転移と名詞句の優位性の階層 | 近 松 明 彦 |
| (C 8) Empathy Conflict and Discourse | 北 爪 佐知子 |

閉会の辞

◇ 受贈図書リスト (平成元年12月1日～2年6月30日)

- 大阪教育大学紀要 第I部門 人文科学 第38巻 第1号, 2号
 (大阪教育大学 1989)
- 音声学会会報 第191号, 192号-1989, 第193号-1990
 (日本音声学会 1989~90)
- 計量国語学 17巻3号-1989, 17巻4, 5号-1990
 (計量国語学会 1989~90)
- 研究紀要 第11巻 第1号 (鹿児島女子大学 1990)
- 言語の世界 Vol. 7 No. 2 (言語研究学会 1989)
- 言語文化研究 16 (大阪大学言語文化部 1990)
- 言語文化研究 第8号
 (東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会 1990)
- 言文だより No. 7 (大阪大学言語文化部 1990)
- 国語学 159-1989, 160-1990 (国語学会 1989~90)
- 国立国語研究所年報 昭和63年度 40 (国立国語研究所 1989)
- ことばを考える 2 (愛知大学言語学談話会編) (駿河台出版社 1990)
- 宗教研究 282 第63巻 第3輯-1989, 283 第63巻 第4輯-1990
 (日本宗教学会 1989~90)
- 新訂翻訳名義大集 (石濱裕美子・福田洋一著) (東洋文庫 1989)
- 人文科学科紀要 第91輯 XXIV
 (東京大学教養学部人文科学科国文学・漢文学研究室 1990)
- 人類科学 42 (九学会連合 1990)
- 生成文法の方位 (平河内健治篇) (松柏社 1990)

- 専修語学ラボトリー論集 第18号 (専修大学LL研究室 1989)
- 武庫川女子大学言語文化研究所年報 第1号 (武庫川女子大学 1989)
- 朝鮮学報 第百三十三輯-1989, 第百三十四輯-1990 (朝鮮学会 1989~90)
- 通信 第67号-1989, 第68号-1990
(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1989~90)
- データに見る現代英語表現・構文の使い方 (田中茂範著) (アルク 1990)
- 展示会ガイド No. 19 (コンベンション・フォーラム 1990)
- 東方学 第七十九輯 (東方学会 1990)
- 東方学会報 No. 57 (東方学会 1989)
- 都大論究 第27号 (東京都立大学国語国文学会 1990)
- 日本学術会議月報 第30巻12月号-1989, 第31巻1月~6月号-1990
(日本学術会議広報委員会 1989~90)
- 日本語研究 第11号 (東京都立大学国語学研究室 1989)
- 日本常民文化紀要 第15輯 (成城大学大学院文学研究科 1990)
- 日本民俗学 178, 179 (日本民俗学会 1989)
- 日本列島言語史の研究 (中本正智著) (大修館書店 1990)
- 認知科学の発展 第2巻 (日本認知科学会編)
(講談社サイエンティフィック 1990)
- プロピレア 第1号 (ギリシア語・文学研究会 1989)
- 文学研究 第87輯 (九州大学文学部 1990)
- 法政大学文学部紀要 第35号 (法政大学文学部 1989)
- 民俗文化 第317号 (滋賀民俗学会 1990)
- みんぱく 12月号-1989, 1月~6月号-1990
(国立民族学博物館 1989~90)
- 明海大学外国語学部論集 第2集
(明海大学外国語学部紀要編集委員会 1989)
- 山形女子短期大学紀要 第22集 (山形女子短期大学 1990)
- 山口国文 第13号 (山口大学人文学部国語国文学会 1990)
- 山口大学教養部紀要 人文科学篇 第22巻-1988, 第23巻-1989

- (山口大学教養部 1988~89)
- 山口大学文学会志 第40巻 (山口大学文学会 1989)
- 立正大学国語国文 第26号 (立正大学国語国文学会 1990)
- 立命館言語文化研究 1巻1号-1989, 1巻2号-1990
(立命館国際言語文化研究所 1989-90)
- 連枝の世紀 (透土社 1990)
- 論集 45 (神戸大学教養部 1990)
- Acta Asiatica 58 (東方学会 1990)
- American Translators Association Series Vol. IV
(State University of New York at Binghamton <SUNY> 1990)
- ArOr Vol. 57 3, 4 (Academia Praha 1989)
- BCTEA Bulletin No. 3
(University/College Teachers of English Alumni Association 1989)
- Вестник Ленинградского Университета 4 (Ленинград 1989)
- Bulletin No. 125, 126-1989, No. 127-1990
(The Linguistic Society of America 1989~90)
- Bulletin of the School of Oriental and African Studies
Vol. LIII Part 1
(The School of Oriental and African Studies:
University of London 1990)
- English Linguistics Vol. 6 (日本英語学会 1989)
- Language Vol. 65 No. 3, 4-1989, Vol. 66 No. 1-1990
(The Linguistic Society of America 1989~90)
- Linguistics and Literature 1 (Bulgarian Academy of Sciences 1989)
- Litteratura 10 (名古屋工業大学外国語教室 1989)
- Naše řeč 4, 5-1989, 1, 2-1990
(Academia nakladatelství Československé akademie
věd 1988~89)
- Русская Литература 4 (Академия Наук СССР 1989)

Русский Язык в Школе 5, 6

(Просвещение 1989)

Slovo a Slovesnost L4-1989, LI1-1990

(Československá Akademie Oriental Institute Čsav 1989~90)

Українська мова і література в школі

(Радянська Україна 1989)

- ◇ 平成2年度春の叙勲において、本学会会員酒井良夫、松村 明両氏は、勲三等旭日中綬章を受章されました。本会として、心よりお祝い申し上げます。
-

- ◇ 本誌は、文部省平成2年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである。